

スポーツ推進計画「10年後の理想像」(委員からの意見)

年代等	10年後の理想像	理想像とのギャップ	委員名
幼稚園・保育園	一日の生活時間の中で必ず仲間と一緒に群れて体を動かす(遊び、スポーツ)時間が確保されている。	<ul style="list-style-type: none"> ・体を動かす環境がない。(時間・場所の制限 危機管理の観点) ・親のこの時期における子供の健康、スポーツに関する知識不足。 	矢島委員
	体を動かすことの楽しさを経験させてくれる。		
	すべての子供たちが運動に親しみ体力向上	まだまだ「知力」だけを早期教育している風潮？	城下委員
	山や川などの自然に親しみ、体を汚して遊ぶ楽しさを味わう。	外遊びの重要性を保護者・保育士・教諭が認識不足？	
	家族ぐるみでスポーツ(体を動かす)をする(上田市丸子爆水ラン)	まだまだ不足	
	小さいころから山や川に親しみ、体を汚して遊ぶ経験ができる。		
はだしやわらぞうりで過ごす・・・足裏感覚			
小学生	体育が必修教科・科目として教育課程に位置づいている。	<ul style="list-style-type: none"> ・体育授業の課題 ・運動の嫌いな児童が多くなっている。 ・放課後、休日など運動する機会が少ない。 ・様々なスポーツ経験不足。スポーツとの出会いの場が少ない。 	矢島委員
	生涯にわたってスポーツに親しみ、人生を健康で明るく豊かに過ごしていく実践力を身につけることや、自己の限界や可能性にチャレンジしていく児童生徒たちの知識や技能を高めていく体育授業や、スポーツ活動が行われている。		
	児童、生徒が日本国内大会はもとより、国際大会開催をとおして各学校段階を通じて、運動やスポーツへの関心が高まり、 「する」:楽しむ 学ぶ 勝つ 「みる」:楽しむ 応援する 伝える 「教える」:調べる 支える 育てる 等 多様なスポーツとの関わり方を楽しんでいる。		
	学校の体育の授業の質の向上	専科の教員の配置が必要(組体操・柔道など)	城下委員
	学校ではただ単にスポーツ(体育)するだけでなく、しっかりと目標がある。	授業の三観点の徹底	
	達成感や仲間と協力する楽しさにつながるような指導		
ハイレベルな試合が観戦できる。それによって「自分もやりたい！」と思う。	まだまだ不足		
中学生	体育が必修教科・科目として教育課程に位置づいている。	<ul style="list-style-type: none"> ・体育授業の課題 ・女子生徒の運動嫌い、体力低下。 ・運動部活動:勝利至上主義、ブラック部活、社会体育との共存 	矢島委員
	生涯にわたってスポーツに親しみ、人生を健康で明るく豊かに過ごしていく実践力を身につけることや、自己の限界や可能性にチャレンジしていく児童生徒たちの知識や技能を高めていく体育授業や、スポーツ活動が行われている。		
	児童、生徒が日本国内大会はもとより、国際大会開催をとおして各学校段階を通じて、運動やスポーツへの関心が高まり、 「する」:楽しむ 学ぶ 勝つ 「みる」:楽しむ 応援する 伝える 「教える」:調べる 支える 育てる 等 多様なスポーツとの関わり方を楽しんでいる。		
	部活動にも、継続して指導できる指導者が付いている。(教員は移動がある)	まだまだ不足	城下委員
	外部指導者も、教育的指導ができるよう研修会がもたれている。	外部指導者の勝利至上主義のエスカレートした指導	
	部活を引退後もスポーツできるしくみ。部活動とは別の放課後スポーツ		
学校の体育の授業の質の向上	専科の教員の配置が必要(組体操・柔道など)		
	やる生徒はやりすぎ。やらない生徒はまったくやらない。		

高校生	体育が必修教科・科目として教育課程に位置づいている。		
	生涯にわたってスポーツに親しみ、人生を健康で明るく豊かに過ごしていく実践力を身につけることや、自己の限界や可能性にチャレンジしていく児童生徒たちの知識や技能を高めていく体育授業や、スポーツ活動が行われている。	・体育授業の課題 ・運動の好き嫌いのはっきりした2極化 ・運動部活動：加入率の低下、勝利至上主義、ブラック部活、人気競技への集中、競技転換の機会が少ない、教員の高齢化、教員の競技バランス、大会を支える人材不足、大会開催運営の課題	矢島委員
	児童、生徒が日本国内大会はもとより、国際大会開催をとおして各学校段階を通じて、運動やスポーツへの関心が高まり、 「する」：楽しむ 学ぶ 勝つ 「みる」：楽しむ 応援する 伝える 「教える」：調べる 支える 育てる 等 多様なスポーツとの関わり方を楽しんでいる。		
	学校の部活の中で始めたスポーツを、クラブチームの指導者と連携を取り育成（強化合宿や強化練習）	やる生徒はやりすぎ。やらない生徒はまったくやらない。まだまだ不足	城下委員
大学生	学業とスポーツをうまく両立	やる生徒はやりすぎ。やらない生徒はまったくやらない。	城下委員
20代～30代	忙しい年代だが、SPに親しむ事ができる。	身近にスポーツをする施設が不足	城下委員
	企業でも健康の為にSPに親しむシステムがある。(NO残業日にSPをする)	企業の健康維持への対応が不足	
40代～50代	忙しい年代だが、健康維持の為にSPに親しむ事ができる。	身近にスポーツをする施設が不足	城下委員
	企業でも健康の為にスポーツに親しむシステムがある。(NO残業日にSPをする)	企業の健康維持への対応が不足	
60代～	個人で気軽にできる体操の開発(信濃の国でダンス・上田健康体操など)	身近にスポーツをする施設が不足	城下委員
	身近で仲間と楽しく体を動かす事ができる健康づくりのイベントや各種SPイベントの開催	まだまだ不足	
	シニアスポーツの発展	若い世代もシニアスポーツを経験する。(ペタンク・ゲートボールなど)	
	ロコモティブシンドローム予防のための運動習慣に関する広報等の実施	「メタボ」の認知度に比べ「ロコモ」は低い?	

競技 スポーツ	各競技とも計画的に世代別育成プログラムにより計画的に選手育成が行われている。	<ul style="list-style-type: none"> ・競技者の一貫指導体制が不十分 ・広域のために競技の強化拠点が曖昧になりやすい。 ・競技自体の存続が危ぶまれる競技団体がある。 ・最新の設備を有した強化支援施設が必要 	矢島委員
	世代別カテゴリーと運動部活動(小・中・高)の連携ができている。		
	各競技ごと大会運営スタッフ、有資格指導者、有資格新派人等組織体制が整備されている。		
	幼少期から継続した指導の場がある。	SP人口の裾野を拡大をした上で、その頂点に立つ競技スポーツ人を育成するシステムの構築が必要	
	強化合宿や強化練習が行われる。	まだまだ不足	
スポーツの 持つ 多面性の 活用	児童、生徒が日本国内大会はもとより、国際大会開催をとおして各学校段階を通じて、運動やスポーツへの関心が高まり、 「する」:楽しむ 学ぶ 勝つ 「みる」:楽しむ 応援する 伝える 「教える」:調べる 支える 育てる 等 多様なスポーツとの関わり方を楽しんでいる。	人気スポーツ大会や大規模大会の開催が求められているが大会開催にコストがかかる。	矢島委員
	トップアスリートの技術や指導を地域に還元する。(オリンピックとの交流)	まだまだ不足	
	障がい者とスポーツを通じて交流ができる。	障がい者スポーツの認知度が低い	
	SPを支える人材の育成と施設の整備など、ハードとソフトの充実	まだまだ不足	城下委員
	長野県特有のものを生かす工夫(登山・トレッキングなど)		
	身近な自然に親しみながらのSP		
	SPする人・見る人・支える人の交流		
市町村と連携して、県外のスポーツチームの合宿などを誘致			
SPが観光や経済の発展・地域の活性化にもつながっている。			
地域 スポーツ	東京2020オリパラのレガシーの活用等により、総合型地域スポーツクラブの育成率や、経営の安定性が向上している。	自主財源、会員や指導者の確保等、永続的な安定運営が困難である。	小林委員
	障がい者スポーツが身近なものとなり、地域スポーツを通して、健常者と障がい者が体を動かしながら、日常的に交流することができる。	障がい者スポーツが身近なものとなり、地域スポーツを通して、健常者と障がい者が体を動かしながら、日常的に交流することができる。	
女性	幼少期から老年期まで、ライフステージを通じてスポーツを楽しみながら、健康を維持する人的・物的環境が整備され、スポーツによる健康長寿社会が形成されている。	幼少期や学童期にスポーツを楽しむ経験が得られず、成人後にほぼ全くスポーツをしない女性が多い。	小林委員
	女性特有のけがや病気等に関する医学的知識が正しく普及し、指導者はもとより、選手もそれをきちんと理解した上で競技に取り組んでいる。	生理や妊娠等、女性特有の体の問題について、医学的知識が、選手・指導者ともに不足した状態のままトレーニング等が実施される場合がある。	

学校体育・スポーツの充実

2015年 スポーツ庁発足

政策課

学校体育室
(学校体育・運動部活動)



「知・徳・体」を育む学校体育(体育授業・運動部活動)が学校教育の中にしっかりと位置づけられた

↓
小学校入学～高校卒業まで全ての児童生徒が履修する必修教科・科目

↓
生涯スポーツ、競技スポーツ、障がい者スポーツの
コアとなる学校体育・スポーツ

H29年告示 新教育課

「21世紀型能力」育成すべき資質・能力の「三本柱」

- ① 何を知っているか、何ができるのか。(個別の知識・技能)
- ② 知っていること、できることをどう使うか。
(思考力・判断力・表現力等)
- ③ どのように社会と関わり、よりよい人生を送るか。
(学びに向かう力、人間性等)

体育についての改定の方向性

(中教審教育課程企画特別部会 H27.8.20公表 論点整理)

- 学習したことを実生活や実社会で生かし、運動の習慣化につなげること。
- 技能や知識、思考力・判断力・表現力等、公正・協力・責任・参画等の態度をバランスよく育むこと。
- 幼児期に育まれた健康な心と体の上に、小・中・高等学校教育を通じて育成すべき資質・能力を、3つの柱に沿って明確化し、バランスよく育成していくこと。
- 東京オリンピック・パラリンピック競技大会を契機としながら、各学校段階を通じて、運動やスポーツへの関心を高め、「する、見る、支える」などの多様なスポーツとの関わりを楽しめるようにしていくこと。
- 国際的なスポーツ大会の役割について新たに東京パラリンピックを含めて学ぶこと。
- 他教科等に於ける学習と連携しながら、東京オリンピック・パラリンピック競技大会の成果を未来への遺産として子どもたちの中に根付かせていくための学びを充実させていくこと。